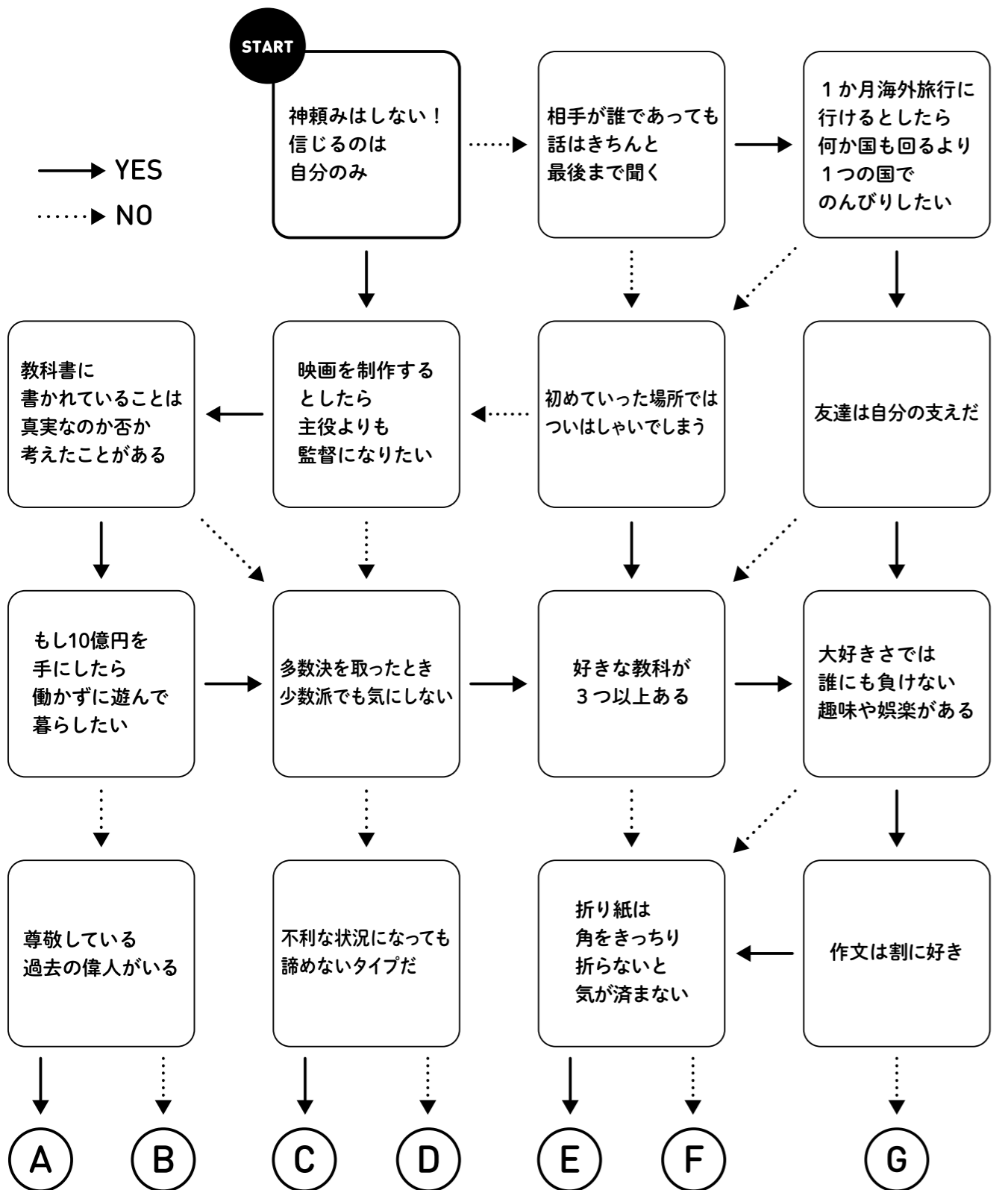


# 音楽診断

## 第9回 フランスの作曲家編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第9弾。今回のテーマはフランスの作曲家です。フランス出身の7人の有名な作曲家の中から、あなたに似ている人物をご紹介します。

監修・解説 = 山田治生  
Text = Haruo Yamada



あなたの  
タイプは？

### A 情熱的に信念を貫き、ピンチをチャンスに変える ベルリオーズ (1803年~1869年)

時代を超越した、突然変異の天才。医学生だったベルリオーズは、作曲への情熱を抑えきれず、医学を捨て、22歳でパリ音楽院に入学した。人気舞台女優に熱烈な片思いをするが、あえなく失恋。そこで彼女の気を引くために『幻想交響曲』を作曲。自らの恋愛体験を交響曲に持ち込んだ画期的なこの作品は大成功を収め、彼はパリの音楽界の寵児となった。彼はピアノさえ十分に弾けなかったというが、そんな欠点がかえって既成概念にとらわれない独自の音楽を生み出したともいえる。



### C 器が大きく細やかな心配りもできる ラヴェル (1875年~1937年)

「音の錬金術師」と呼ばれることがあるほどの管弦楽法の大家。母親がスペインのバスク系であったことから、スペインに大いなる憧れと愛着を抱き、スペインと関係の深い作品を少なからず残した。スペイン舞曲に由来する『ボレロ』もそんな曲の一つ。『ボレロ』は、主題の展開や転調もなく、楽器の組み合わせによる音色や音量の変化のみによって、聴き手を魅了する。まさにラヴェルの天才的な管弦楽法が示された作品である。



### E 多ジャンルで活躍する国際派 サン=サーンス (1835年~1921年)

2歳半でピアノを弾き、3歳で作曲を始め、10歳でリサイタルを開くなど、神童として注目された。そのほか6歳でラテン語を読み始め、天文学、考古学、占星術、魔術にも興味をもったという。彼は作曲家兼ピアニストとして旅の多い人生を送り、異国趣味的な作品を好んで書いた。神童は86歳まで長生きし、若い頃は革新的な作曲家とされていたが、後年は古典主義者、保守主義者とみなされるようになってしまった。2021年が没後100年にあたる。残した作品に『動物の謝肉祭』や歌劇『サムソンとデリラ』などがある。



### G オリジナリティ 抜群の革新者 サティ (1866年~1925年)

その独特な世界観に基づく音楽によって、20世紀末に静かなブームとなった。彼の作品のなかで最も人気が高い『ジムノペディ』は、古代ギリシャの神を讃える祭典における裸の踊りを意味する。ドビュッシーと交友があり、彼の自由で独自の音楽は、ラヴェルや「六人組」\*など後の世代の作曲家へ大きな影響を与えた。同じ旋律が840回繰り返される『ヴェクサシオン』はミニマル音楽の先駆者であり、『家具の音楽』は環境音楽へとつながっていく。



\*「フランス六人組」と呼ばれる、フランスの作曲家6人(デュレ、オネゲル、ミヨー、タイユフェール、プーランク、オーリック)のグループ。音楽観は各人各様で、20世紀前半に活躍した。

### B 自由さと柔軟性も持ち魅力的 ドビュッシー (1862年~1918年)

印象主義音楽の先駆者と呼ばれることがあるが、ドビュッシー自身は印象主義に分類されることを嫌ったという。マラルメの詩からインスピレーションを受けて1894年に書き上げられた『牧神の午後への前奏曲』は20世紀音楽への道を切り拓き、全音階(半音を含まない6つの全音からなる音階)を用いるなど、独創的な和声法と管弦楽法で、近現代音楽への扉を開いた。アフリカ音楽やバリ万国博覧会で聴いたジャワの音楽(ガムラン)にも影響を受けていた。



### D 完璧主義の頭脳派 デュカス (1865年~1935年)

パリに生まれ、パリ音楽院でギローに学び、ワーグナーの影響を受け、ドビュッシーと親交があった。歌劇『アリアーヌと青ひげ』、バレエ音楽『ラ・ペリ』、『交響曲ハ長調』などの作品を残しているが、彼の最も有名な作品は、1897年に作曲された、ゲーテの詩に基づく交響詩『魔法使いの弟子』である。晩年はパリ音楽院教授として後進の指導にあたり、門下生にはメシアンもいた。自らに厳しく、数多くの曲を書いたものの、遺されている作品は少ない。



### F 才能があるけど努力も惜しまない ビゼー (1838年~1875年)

早くから音楽の才能を示し、9歳でパリ音楽院に入学。17歳で交響曲を書き、19歳でローマ大賞を受賞。1863年作曲の『真珠採り』でオペラ作曲家として認められる。1872年に劇付随音楽『アルルの女』を作曲。最後のオペラ『カルメン』の初演は成功を収めることができず、その3か月後、ビゼーは36歳の若さで急逝。しかし彼の死後、『カルメン』は世界中の歌劇場で最も人気のあるオペラの一つとなった。ビゼーのいちばんの魅力はその溢れ出る旋律の美しさにあるといえる。



山田治生(音楽評論家)

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ〜大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人〜ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の楽しみ方』(以上、アルファベータ)、編著書に『戦後のオペラ』(新国立劇場情報センター)、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』(アルファベータ)などがある。